

第5節 門司税関独立

1 時代背景

日清戦争により清国の弱体ぶりを知った欧米列強は、勢力範囲を設定していった。ロシアも中国東北部を事実上占領し、日本の朝鮮半島（韓国）における権益がおびやかされるおそれがあったため、日本は、ロシアとの開戦論に傾いていった。明治37年（1904）、ロシアとの交渉が決裂し日露戦争が始まった。その後、明治43年（1910）には韓国併合と大陸への足場を着々と固めていった。

2 門司税関独立の頃までの門司港貿易状況

入港隻数は順調に増加し、明治34年（1901）から3年連続で全国1位となり、その後も神戸に次いで全国2位という状況が続いていた。

【入港隻数】 単位：隻 「日本関税・税関史資料から」

	明治 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年	41年	42年	43年	44年
門司	1,453	1,856	3,395	3,367	4,100	3,070	3,778	5,324	5,183	4,731	4,224	4,115	3,905
下関	1,650	2,036	1,229	1,039	1,258	1,615	2,210	2,435	2,700	2,436	2,094	1,334	14
若松						133	311	590	663	878	910	846	758
横浜	1,414	1,515	1,625	1,630	1,882	1,524	1,818	2,114	2,342	2,301	2,169	2,182	2,251
神戸	2,561	2,688	2,907	3,070	3,583	3,090	4,182	5,387	5,366	4,873	4,886	4,816	4,508
大阪	188	237	312	299	413	619	1,209	1,327	1,258	944	938	841	454
名古屋									6	70	57	62	51
長崎	2,163	2,102	2,368	2,238	2,283	1,483	1,599	2,447	2,482	2,414	2,114	1,917	1,893
函館	478	561	552	611	642	79	61	302	549	486	553	625	657

【貿易額】 単位：万円 「日本関税・税関史資料から」

	明治 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年	41年	42年	43年	44年
門司	680	915	1,885	1,914	2,390	2,315	3,137	4,044	4,546	3,690	2,983	3,417	3,454
下関	563	1,156	517	274	210	228	330	585	677	1,052	1,318	1,029	84
若松						39	146	361	414	568	666	684	604
横浜	18,473	20,590	22,235	22,831	25,746	30,654	33,430	34,992	37,838	34,209	33,616	37,946	40,392
神戸	19,561	20,719	20,319	21,926	24,505	26,283	30,307	30,280	33,011	27,520	28,484	35,268	37,730
大阪	1,265	1,937	2,289	2,693	3,490	4,777	7,444	8,479	9,447	7,282	7,302	7,582	6,359
名古屋									20	243	280	278	209
長崎	1,736	2,237	1,863	1,380	1,782	2,516	2,386	1,915	2,089	1,835	1,290	1,222	1,384
函館	384	514	475	480	711	286	323	485	294	269	251	252	209

明治43年（1910）日本が韓国を併合したことにより、対韓貿易は国内輸送となったため、対韓貿易が多かった下関の実績は、明治44年に急落している。

3 門司港の主要輸出入品目推移

門司港が開港となった明治 32 年（1899）以降、輸出入品の多様化が進んでいる。

輸出では、石炭輸出比率は、明治 32 年からしばらくの間 70%程度であったが、明治 40 年には 40%にまで低下した。代わって、綿糸、セメント、精糖など、北部九州に進出した新産業の製品が登場している。

明治 32 年（1899）の開港により輸入も行われるようになり、機械類の輸入のほか、繰綿や砂糖など、新産業の原料輸入が始まった。

【門司港における主要輸出入品目の推移】単位：万円 「大日本外国年表から」

輸出

	明治 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年
石炭	424.4	443.8	1,139.2	1,049.7	1,120.1	758.1	578.7	622.2	779.6
石炭輸出比率	68.9%	77.9%	83.7%	76.0%	72.2%	58.3%	39.1%	33.5%	40.9%
綿糸	3.1	37.0	117.9	206.0	341.9	309.4	402.2	415.3	405.9
木材							52.6	161.1	197.4
精糖							201.8	305.8	131.6
セメント			8.8	18.7	35.4	31.6	28.8	77.8	60.2
米	158.2	3.8	44.6	50.0	12.2	43.2	16.5	32.7	24.4
その他	29.8	85.2	51.3	57.3	42.4	157.0	198.9	242.7	305.9
門司合計	615.6	569.9	1,361.8	1,381.7	1,551.9	1,300.0	1,479.5	1,857.6	1,905.0
全国シェア	2.9%	2.8%	5.4%	5.3%	5.4%	4.1%	4.6%	4.4%	4.4%
全国輸出額	21,149.5	20,443.0	25,235.0	25,830.3	28,950.2	31,926.1	32,153.4	42,375.5	43,241.3

輸入

	明治 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年
砂糖		8.5	46.3		42.5	180.3	274.5	593.0	709.1
繰綿		45.8	153.8	276.6	364.1	334.8	493.3	567.1	646.7
肥料(豆粕等)			7.6	17.1	31.9	18.8	82.6	259.5	404.1
機械類		91.0	112.2	101.8	91.0	73.5	130.9	260.2	204.9
小麦粉					129.8	97.6	90.6	83.4	66.4
鉄鋼石				34.5	36.0	23.7	41.6	41.6	17.2
レール		71.6	16.7	3.3	57.3				
米					7.0	53.6	116.8		
その他	63.9	127.7	186.7	98.7	114.5	256.8	427.7	381.9	593.0
門司合計	63.9	344.6	523.4	531.9	838.1	1,015.4	1,657.9	2,186.7	2,641.3
全国シェア	0.3%	1.2%	2.0%	2.0%	2.6%	2.7%	3.4%	5.2%	5.3%
全国	22,040.2	28,726.2	25,581.7	27,173.1	31,713.6	37,136.1	48,853.8	41,878.4	49,446.7

【コラム】産業の勃興 1

門司港の貿易品目は、特別貿易港指定からしばらくは石炭輸出のみであったが、その後、背後の産業が発達するにつれ、品目の多様化が進んだ。明治期、北部九州に興った産業についていくつか紹介する。

官営八幡製鉄所

産業の基盤となる鉄の生産は、明治政府として取り組むべき大きな課題であった。北部九州には背後に筑豊の石炭があり、製鉄所建設に適した場所の一つだった。明治 31 年 (1898) 八幡に本格的な製鉄所建設が始まり、明治 34 年 (1901) 2 月 5 日、東田第一高炉において火入れが行われ、日本で初めて近代製鉄が誕生した。鉄鉱石は、権益を持っていた中国の「大冶鉄山 (たいやてつざん)」から調達しており、門司港から輸入した。

浅野セメント会社

門司港近くの関門海峡沿いに、廃墟と化したセメント工場があった。明治 26 年 (1893) に操業開始した浅野セメントの門司工場である。工場建設の理由の一つに、背後に石灰石が豊富にあったことがあり、北部九州には他社のセメント工場も操業し、セメントは門司港の主要輸出品として登場している。

浅野セメントは、明治 17 年 (1884) 東京の官営深川セメントの払い下げを受け設立され、戦後、日本セメントに社名変更し、平成 10 年 (1998) には秩父小野田セメントと合併して太平洋セメントとなった。門司工場は、昭和 55 年 (1980) に操業停止し廃墟となっていたが、平成 20 年末 (2008) から 21 年にかけて解体された。

明治紡績

明治 41 年 (1908) 戸畑に創業した明治紡績は、太平洋戦争中の企業統合で敷島紡績 (シキボウ) に統合された。戦後は閉鎖され広大な跡地は工業用地となった。当時の貿易を見ると、綿を輸入し、綿糸に加工して輸出していたものと考えられる。

関門製糖

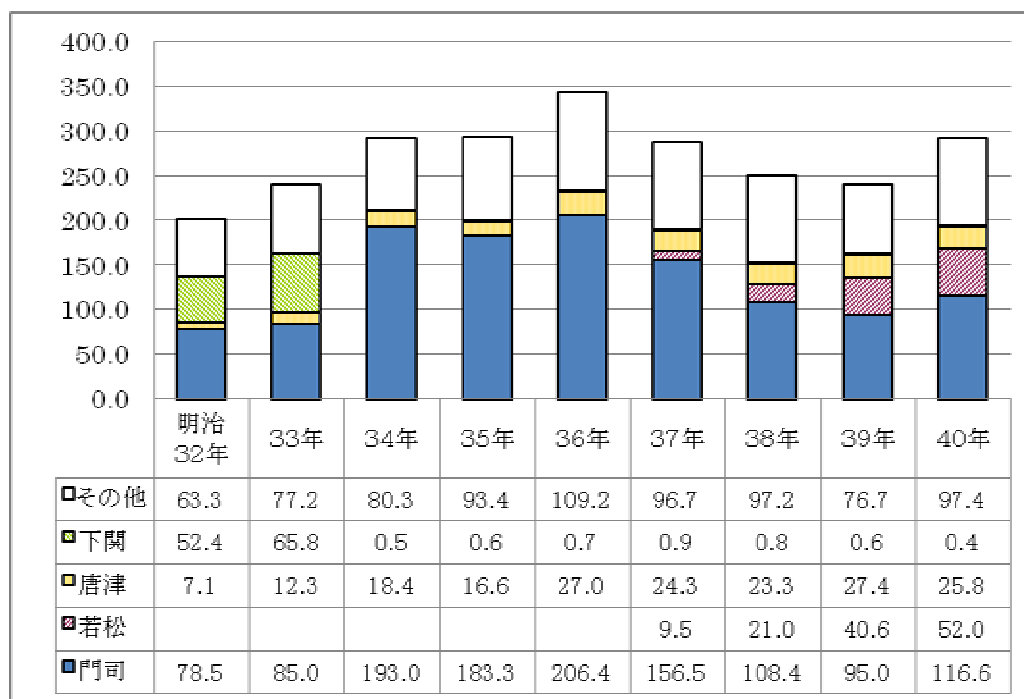
明治 37 年 (1904) 戦前の財閥であった鈴木商店が門司に大里製糖所を開業した。明治 40 年 (1907) には大日本製糖によって買収された。当時の主要輸出品に精製糖が上がっている。その後いくつかの変遷があって、日本甜菜製糖と大日本明治製糖の生産受託会社となって関門製糖と改称した。

4 石炭輸出動向

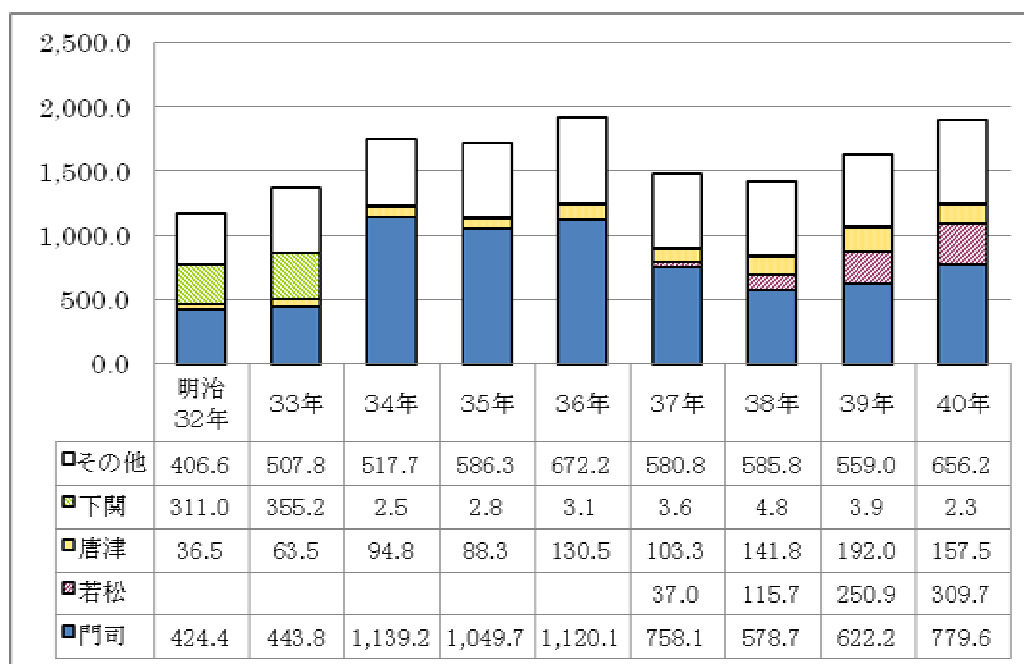
門司港は、明治 32 年（1899）の開港後も石炭輸出トップの座を守っているが、明治 37 年（1904）に若松港が開港してからは、徐々にシフトしている。

【石炭輸出推移】 「大日本外国年表から」

重量ベース（単位：万トン）



金額ベース（単位：万円）



【コラム】全国の石炭輸出について

門司港は、明治 22 年（1889）特別輸出港に指定後、急速に石炭輸出シェアを拡大し、明治 29 年には石炭輸出日本一となり、ピークの明治 34 年（1901）には、数量ベースで 66%、金額ベースで約 65%を占めるに至った。

下関港でも明治 33 年（1900）までは石炭輸出が多かったが、明治 34 年にほとんどなくなり門司港にシフトした。

若松港は、明治 37 年（1904）に開港となり、その後、石炭輸出が門司港からシフトしていく。

全国で石炭輸出の多い港を調べると、長崎と口之津（長崎県）がある。これも口之津の輸出が増えるにつれ長崎の輸出量は減っている。

【全国の石炭輸出推移】 「大日本外国年表から」

数量ベース（単位：万トン）

	明治 23年	24年	26年	27年	28年	29年	30年	31年	32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年
門司	9.1	13.6	35.7	33.8	34.9	58.3	60.6	78.8	78.5	85.0	193.0	183.3	206.4	156.5	108.4	95.0	116.6
全国シェア	10.7%	15.2%	32.6%	26.7%	25.3%	36.1%	39.6%	43.6%	39.0%	35.4%	66.0%	62.4%	60.1%	54.4%	43.2%	39.6%	39.9%
口之津	28.8	30.8	41.9	35.7	41.8	40.1	31.8	37.1	42.9	53.7	48.7	61.9	72.4	76.4	77.6	56.1	70.2
若松														9.5	21.0	40.6	52.0
唐津	2.8	3.6	3.9	6.9	6.6	4.5	6.8	8.1	7.1	12.3	18.4	16.6	27.0	24.3	23.3	27.4	25.8
住ノ江																8.7	10.1
長崎	36.6	35.4	23.3	15.0	14.8	14.7	13.2	13.5	9.9	10.3	18.8	17.1	20.5	10.6	6.5	7.8	9.2
室蘭	0.0	0.0	0.0	0.6	3.6	5.9	10.6	6.2	5.3	8.6	10.1	13.0	15.1	9.3	12.2	2.4	5.6
下関	0.7	0.3	1.6	28.0	31.7	34.6	23.8	34.3	52.4	65.8	0.5	0.6	0.7	0.9	0.8	0.6	0.4
小樽	0.8	1.5	1.8	4.9	2.4	3.1	6.1	2.1	1.6	2.1	2.3	0.1	0	0	0	0	0
その他	0.1	0.1	0.1	0.7	1.5	0.1	0.0	0.5	0.1	0.1	0.2	0.4	0.6	0.3	0.6	1.6	2.2
全国	85.3	89.5	109.5	126.6	137.6	161.5	153.0	180.5	201.4	240.3	292.2	293.9	343.3	287.9	250.8	240.2	292.2

金額ベース（単位：万円）

金額(円)	明治 23年	24年	26年	27年	28年	29年	30年	31年	32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年
門司	29.3	44.8	93.1	123.7	126.5	215.9	340.5	545.4	424.4	443.8	1,139.2	1,049.7	1,120.1	758.1	578.7	622.2	779.6
全国シェア	9.5%	14.1%	28.3%	26.5%	23.4%	34.6%	40.9%	44.6%	36.0%	32.4%	64.9%	60.8%	58.2%	51.1%	40.6%	38.2%	40.9%
口之津	76.9	90.3	142.0	144.5	183.9	165.2	150.6	246.9	285.0	358.4	319.5	390.2	460.1	460.8	465.7	419.7	484.9
若松														37.0	115.7	250.9	309.7
唐津	9.6	12.5	10.6	23.9	25.3	17.9	28.9	39.4	36.5	63.5	94.8	88.3	130.5	103.3	141.8	192.0	157.5
住ノ江																62.9	64.1
長崎	162.9	148.5	67.4	48.9	53.1	53.4	69.6	86.7	53.4	60.6	112.2	100.0	102.2	53.2	34.0	47.9	51.6
室蘭	0.0	0.0	0.0	2.5	16.0	29.9	64.0	48.1	36.0	59.8	72.3	88.6	103.9	65.6	81.3	17.1	39.1
下関	2.6	0.9	5.7	100.9	122.4	127.4	142.6	239.8	311.0	355.2	2.5	2.8	3.1	3.6	4.8	3.9	2.3
小樽	1.6	3.6	5.5	17.1	11.1	13.1	35.1	14.9	10.5	14.8	12.2	0.6	0	0	0	0	0
その他	0.2	0.4	0.2	2.9	0.8	0.3	0.2	2.8	0.3	0.6	0.8	1.8	2.5	1.2	3.2	11.5	16.6
全国	310.0	317.9	328.9	467.4	540.9	624.3	831.7	1,224.1	1,178.5	1,370.4	1,754.2	1,727.0	1,926.1	1,482.8	1,426.8	1,628.0	1,905.3

5 門司税関独立

門司港は、明治 32 年（1899）開港後、輸入も伸び、明治 34 年（1901）から貿易額で長崎港を上まわるようになり、大阪に次いで全国第 4 位の貿易港となっていたことから、独立の要望が高まり、明治 42 年（1909）11 月 5 日、門司税関は長崎税関からの独立を果たした。

税関官制

明治 19 年 3 月 26 日勅第 7 号で制定された。

明治 42 年 10 月 23 日勅第 263 号の一部改正により門司税関独立となった。

第二条中「肥前国長崎」ノ次ニ「豊前国門司」ヲ加フ
（第二条の規定「左ノ六港ニ税関ヲ置ク」）
本令ハ明治 42 年 11 月 5 日ヨリ之ヲ施行ス

【独立時の管轄等】

管轄：周防、長門、筑前、豊前、豊後

機構：本関：税関長官房、庶務課、監視課、貨物課、徴収課、監査課、鑑定課

支署：博多、若松 出張所：下関 監視署：小倉、徳山、萩、大分

職員数：231 名

明治 41 年 12 月	1908	門司税関支署庁舎焼失（明治 28 年 3 月新築）
明治 43 年 7 月	1910	門司税関本関庁舎新築。同年 12 月に焼失
明治 44 年 9 月	1911	六連税関監視署、部埼税関監視署設置
明治 45 年 3 月	1912	門司税関本関庁舎新築。



門司税関 公印第 2 号

【門司新報の記事から】～門司税関独立のニュース

門司税関が独立したという「門司新報」の記事があるので抜粋して紹介する。

記事には、明治 40 年（1907）には、門司港は、神戸、横浜、大阪の各港に次いで第 4 位の貿易額となったこと、大蔵省当局も大阪に並ぶとまで言っていること、長崎港の貿易額は門司港の半分ほどしかなく、独立は遅すぎたといったことが記載されている。

門司新報は、明治中期に創刊された北九州地域の新聞であり、昭和 13 年に廃刊となっている。並んだ記事には、紐育市（ニューヨーク市）桑港市（サンフランシスコ市）の市長選結果が報じられており、貿易都市「門司」に本拠地に置く新聞だけあって、読者の興味が海外にまで及んでいたことを推し量ることができる。

~~~~~

独立せる門司税関（抄） 門司新報 明治 42 年 11 月 5 日付

門司税関は、いよいよ本日より、全く母港たりし長崎税関の手より離れて、独立するに至りたり。想ふ 20 年の其の昔、明治 22 年 11 月 15 日、門司港が、5 品特別輸出港として、初めて国際貿易場裡に一步を踏み出すや、当時筑豊の炭田、年間 62 万 9956 トンを算ぜしに過ぎず。その翌 23 年に於ける貿易総額、僅かに 34 万 2830 円なりしも、10 年を経過して出入貿易品目に制限なき一般普通の開港場となりし 32 年の翌年に於ける貿易総額は、857 万 2796 円に達し 10 年間に於いて 25 倍の増進を示したり。

（本誌編者注：特別輸出港指定日と一般開港指定日に違いがあるので、指定の翌年で比較したとの記述あり。）

而して 40 年に於ける全 1 ヶ年の貿易総額は、4546 万 3197 円を算し、之れを 33 年のものに比すれば、5 倍強、之れを 23 年のものに比すれば 133 倍以上の著大なる増進を遂げ、神戸、横浜、大阪に次いで、全国 32 港中、第 4 位を占め、大蔵省当局者をして門司税関の独立の理由として、「関門海峡の貿易は近年急激なる発達を示し、其の貿易額に於いて大阪と比肩し」と云はしむるに至る。尚、最近本年 9 月中、門司港と長崎港との貿易額を比較に見るに、長崎港は 97 万 5104 円に対し、門司港は 226 万 5245 円（下関港の 131 万 6428 円を加算すれば 9 月中に於ける関門海峡の貿易額は 358 万 1673 円に上る）を算したり。即ち長崎は門司に対し其の半額にだに及ばざること遠し。門司税関が今日に於いて独立せるもの、時期の上よりいえば、むしろ甚だ遅れたりとの感なくんばあらず。

然かも既に独立を宣せられたる門司税関は既往に遡って、長短優劣を較するの要を見ず。海峡貿易の発達と相俟って、益々其の事務の進捗と便益を謀らざるべからず。



【門司新報の記事から】～二度の庁舎焼失

門司税関の庁舎は明治 41、43 年の 2 回、火災の被害に遭っている。明治 28 年（1885）に建築された支署庁舎は、独立の約 1 年前の明治 41 年に火災に遭い、翌年 8 月に再建された初代門司税関本関庁舎も、前庁舎焼失のちょうど 2 年後にまたも火災に遭ってしまった。

火災の様子が「門司新報」書かれてあるので抜粋して紹介する。初回の火事では、陣頭指揮をとる笠原支署長（初代門司税関長）の奮闘ぶり、2 度目の火災では、庁舎が門司を一望できる高楼だったことなどが記載されている。

~~~~~

門司税関火災詳報（抄） 明治 41 年 12 月 25 日付

23 日の午後は 8 時 25、6 分のことなり。市内は歳の市に賑ひ盛れる只中。警鐘の暗を破って響き渡れるは門司税関支署の階上東隅統計室に火災の見舞えるを告げたるなり。

笠原税関支署長は発火と同時に庄司の官邸より急行登庁し一面 300 に近き署員を指揮して重要文書其の他を持出さしめ応援に向へる大傳馬船に積込みて、三菱合資會社門司支店の後部建物に収容させ、他面倉庫監視所の防火に奮闘させ各部消防組と内外呼応して鎮火せざれば止まじと指揮する凜々さ云わん方なかりし途端階上中央の階段より紅の舌は階下を甜むべき光景あるや笠原署長は最後の決心を取って立てり。

他なし西部署長室の窓を破って蒸気ポンプの口を挿入させ階段に向けて潮水を猛射せしめたる臨機の動作之れなり此の防火運動は美事に成功して階下に向はんとせる火勢は手際よく阻まれ、同時に外部一般の消防力強盛と成り午後 9 時 30 分頃統計室の屋根を吹き抜ける迄にて火勢は局部に制限せられ同 10 時に垂んとする際全く鎮火するを得たのは不幸中の幸なりき。

税関支署の構造が極めて堅牢なりしが如き、蓋し興って力あるべきが如し。貿易港としての門司市に記念すべき此洋式建物に火災起り夜の間に灰と化し了せざるを得たるはまことに天祐と謂うべきか。

~~~~~

門司税関の焼失（抄） 明治 43 年 12 月 25 日付

昨 24 日午前 10 時 40 分頃門司税関階上なる三菱側の窓より蒙々たる黒煙突然噴出せしを認めた。税関官吏ス八火事よと一同階上に駆け登り職員一同必死となりて消防に努めたるも猛火の勢ひ侮り難し。

（本誌編者注：門司、田野浦、小森江などの消防隊のほか、警察、陸軍、憲兵も駆けつけて消火活動に当たり、対岸の下関の消防隊の応援もあった様子が記載されている）



然るに右税関庁舎は堅牢なるも総て木造の為め遂に全焼に帰し、同日午前 11 時 40 分頃鎮火したり。而して同庁舎は一昨年 12 月 23 日の夜火災に罹り、其後約 8 万円の工費を以て新築に着手し漸く本年 8 月 2 日其工を了へ、落成式を挙げたる次第なりしが、其の二周年の翌即ち昨日再び火災の難に罹りしとは返へす返へすも残念なり。

殊に同庁舎の望楼は門司全下を眼下に見下す計りの高楼なる為め、以前の如く西風なりせば或ひは三菱會社の屋上に打倒れんも知れずと一同憂慮の体なりしが幸ひにも、風位は北に変ぜし為め火先は船溜中に向ひたるにぞ三菱や陸軍運輸部等も延焼の難を免かれたりき。原因は不明なるも其の三階より発火せしと見れば、煤烟の窓より吹込みたるに因るものの如く。

尚ほ老婆危篤の報にて郷里長野縣に帰省中の笠原税関長は発火の急電に接し、昨日午後 2 時出発、主務省を経て帰門との報ありし。



初代庁舎



明治 43 年の火災で焼失



二度目の火災の後に建設された 2 代目庁舎（現在の旧門司税関）

## 6 門司税関仮置場

門司税関仮置場は、明治 43 年( 1910 )2 月、大里町笠松に初めて設置された( 10,650 坪 )。税関仮置場法では、官設のものしか認めていなかったため、請願者である合名会社鈴木商店が土地建物を国に無償で提供し、官設の形をとり請願者が運営していた。

大正元年 8 月( 1913 )の法改正により、私設仮置場が認められることになり、同場の土地建物は請願者に返還している。

### 税関仮置場

外国貨物を輸入する際にかかる税金( 関税 )を保留した状態で、貨物に加工を施して外国に積戻しすることができる場所のことである。貨物を加工して輸出すれば、保留していた関税はかからず、加工貿易を得意とした戦後日本を支えた「保税工場制度」の先駆けである。

### 認許された作業内容

#### ・米穀

朝鮮より刈( かます : 袋 )入りの米穀を移入れ、唐箕( とうみ : 選別機械 )等により塵芥、砂、碎米等を除去し、麻袋に改装して積戻すこと

#### ・食塩

外国塩を移入れ粉碎器により結晶を破壊し、改装して露領沿海州その他へ積戻すこと( 漁業用 )

#### ・赤白油

樟脳油( 「しょうのう」を分離した後の液体 )を精製して生じた赤白油( 防虫剤・殺虫剤・香料などの原料 )を煮沸混合して改装し積戻すこと

## 7 賞罰内規の制定

明治 43 年( 1910 )8 月に「門司税関監吏賞罰内規」を制定している。

### 一、賞( 賞金、賞詞 )

イ 関税等のほ脱犯を発見した者・・・その税額の 5 分の 1

ロ 煙草、塩、輸出入禁制品の密輸犯を発見した者・・・その価額の 10 分の 1

ハ 変災に当り機宣の処置をとり、大事に至らせなかった者・・・2~5 円

### 二、懲罰( 免職、罰俸、譴責 )

イ 職務上しばしば怠慢過失があり、改悛の見込みのない者・・・免職

ロ 関税等ほ脱犯、輸出入禁制品の密輸を覚らなかった者

・・・罰俸月俸 100 分の 5~100 分の 30

ハ 免状その他書類の記入取扱等に粗漏があった者

・・・罰俸月俸 100 分の 1~100 分の 15

## 8 関門統合の上申 ~ 門司税関長から大蔵次官へ

明治 45 年（1912）2 月、初代門司税関長 笠原實太郎氏は、大蔵次官に港湾行政の改善意見として関門統合を含む意見上申を行った。

門司港と下関港はもともと一水域であり、これを二港に区分することで関税行政上、複雑化しているという理由であった。残念ながら、関門港への統一は昭和 15 年（1940）まで実現しなかった。

### 「上申要旨」

#### 一、関門両港を統合すること

（１）関門両港は、本来一水域であり、これを 2 港に区分するため、関税行政上、その取扱いが複雑

イ．一方の港に停泊している船舶から、他の一方に貨物を積卸しする場合、海路輸送の手続が必要

ロ．貿易統計を港別に作るため、計表に手数を要す

ハ．両港のいずれにも寄港して貨物の積卸しをすれば、両港とも税納付が必要

ニ．風波避難のため、他の一方へ入港する事例多し

（２）両港とも港域拡張が必要

（３）海港検疫は、両港とも福岡県港務部が大連において実施中

#### 二、県港務部所管事務を税関に統合すること